

地表処理は野ネズミによる種子捕食を軽減する

ササが林床に密生する北海道の森林では、ササを除去する地表処理（かき起こし、刈り払い）が、森林を再生する方法として大きな成果をあげています。ササの除去により光条件が向上し、種子の発芽や実生の定着がしやすくなるほか、ササが除去された場所では野ネズミによる種子の捕食や実生の食害（写真）が少なくなると考えられています。そこで今回、地表処理が種子の捕食に及ぼす影響を調べるため、道南のブナ林でササ林床と地表処理（かき起こし、刈り払い）後の裸地にブナ種子100粒を皿に置いて、その消失過程を比べてみました。調査は、地表処理当年のほか2年後にも行いました。

かき起こし地と刈り払い地における2調査期の消失過程を図-1に示します。ササ地に置いた種子は2調査期で5~20日以内にすべて捕食されていました。それに対し、地表処理当年ではかき起こし（刈り払い）後の裸地上の種子は、設置後31日でも62（59）%が捕食されないで残っていました。ササ林床では種子の落下直後から野ネズミによる捕食を強く受けること、ササが除かれると野ネズミが活動しにくくなることがわかります。しかし、地表処理から2年経つとササが回復するため種子の捕食率は高くなり、かき起こし（刈り払い）後の地表に置いた種子は31（20）日以内にすべて捕食されていました。したがって、地表処理は野ネズミによる種子の捕食回避に効果があるものの、その効果はササなどの植生の回復に依存していると思われます。今後、地表処理が森林の再生に有効である要因を詳しく検討することで、施業に反映させていきたいと考えています。

（防災林科）

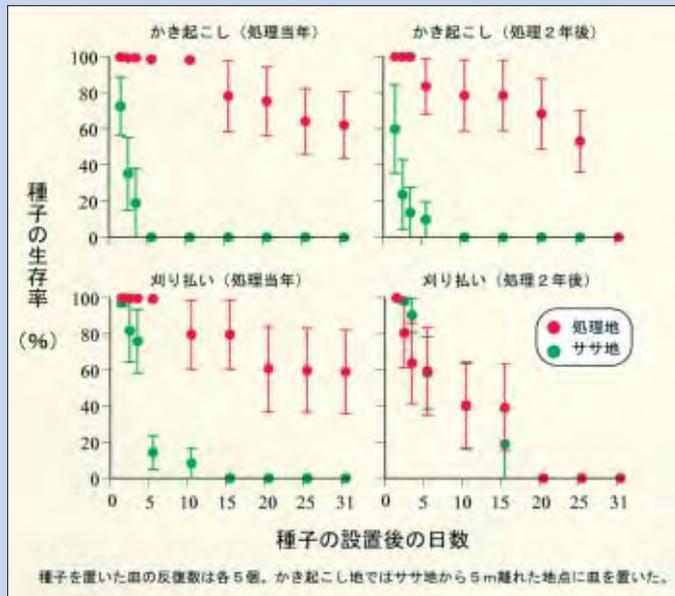


図-1 地表処理当年と2年後における種子の消失課程



写真 食害をうけたブナ実生